ロータリーの神髄-職業奉仕を語る（Ⅲ）

～職業人であるロータリアンの皆様へのメッセージ～

大阪大学総長・哲学者
鷲田　清一

難しい哲学と身近な哲学

哲学はあらゆる学問の中の女王と言われていて、大学で一番基礎的なことをやる学問です。哲学者というのは浮世離れした認識論とか、存在論とか形而上学とか、人生とあまり関係のない理屈だけこねている人たち、というイメージをお持ちの方が多いのではないかと思います。

ところが、こういう難しい哲学とは違う世界で言葉が使われることがあります。家を建てる大工さんの哲学、経営者の経営哲学、人生の哲学などという場合です。人生をいかに歩むかについて、きっちりした考え方を持ち、自分でその通りに生きている人を見ると、「あの人には哲学がある」と言います。こういう哲学を持っている人は町中に一杯おられるわけです。哲学には、このように、「難しくて分かりにくい」という部分と、「あの人には哲学があるなあ」というイメージの両極端の部分があると思います。

臨床哲学･事始（ことはじめ）

私自身は両極端に関わってきました。大学では20歳くらいのときから、ヨーロッパの近代哲学の本をドイツ語やフランス語で読みこなし、多くの学術論文を書いてきました。でも、これは哲学の研究であって、哲学することとは少し違うと、若いときから思っておりました。そんな訳で、若いときから哲学の学会で論文を発表するのと同じぐらいの数の文章を、友達と作った同人雑誌の中に書いてきました。

1980 年代から、偶然、ファッション雑誌に文章を書く機会が出来ました。それ以来10 年ほど、服を着ることの意味、ファッションデザイナーの仕事、ファッションのメディア、などについて、哲学の論文とは、言葉も文体も全然違う文章を書いてきました。その後で、私は臨床哲学をやることになったのです。それまでは、大学の哲学科の倫理学の教授だったのですが、その看板をはずして、「臨床哲学」に変えました。ここで、はじめて、若いときからずっと大学で研究してきた従来型の哲学と、哲学は誰もが持っていないといけないもの、誰もがやらなければならないものという思いでやってきた仕事とを一つに結びつけることを試みました。

臨床哲学の実践

看護師さんの集まりに行った時のことです。若い看護師さんに看護教育をしておられる先生方も含めてリーダー的な方が沢山居られました。「患者の全人的理解をベースにして、看護しないといけない。医療技術を上手にこなし、患者の発言をその言葉通りに受けとめて看護するだけでは駄目だ」とおっしゃる。